二次元ぷち文庫
プリンセスオブヴァンパイア
PRINCESS OF VAMPIRE
神崎美宙
表紙イラスト：緋山狐
試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『プリンセスオブヴァンパイア』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

神崎美宙

表紙／緋山狐

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

アリス＝リリーメイル

ヴァンパイア界の王ヴォルガンク＝リリーメイルの一人娘。気高く気丈で少しワガママなお姫様。

ルーマイユ

ヴァンパイア界の王位を狙い、主人公を挑発して罪を犯させ、その父である現王を失脚させようとたくらむ。

「ひぃっ！　だ、誰っ……⁉」

月が分厚い雲に覆われて、漆黒の闇が辺りを支配する。少女は湧き上がる恐怖心を必死に抑えながら、その小さな口を開いた。静寂を破った不安と心細さにまみれたか細い声は星一つない夜の風景に溶けてしまい、何事もなかったかのように静まり返る。

遅くなったので早く家に帰りたいと思い、普段通らない裏道に入ったのが失敗の始まりだった。元々昼間でも人通りの少ないこの道は照明もなく、夜になれば使用する者などほとんど皆無である。不気味な雰囲気に少女の身体は子猫のようにブルブルと震え、柔かそうな桃色の頬は強張り可愛らしい顔は青ざめていた。

「そ、そら……耳、よね……」

そう自分に言い聞かせながら周囲を見渡した。何かが背後から忍び寄ってくるような気配。後をつけてくるような足音。少女は何度も後ろを振り返り確かめるが、辺りには人影はない。

こんなことならばもっと早く家路につくべきだった。最近は物騒な事件が頻繁に起きているから、夜道を一人で歩くのは避けるようにとの両親からの言いつけを守ればよかったと後悔しても遅すぎる。

背後には誰もいなかったが、無意識のうちに駆け出そうとしたその時だった。何かにぶつかりその反動でぺたんと尻餅をついてしまう。

「きゃっ！」
不気味な空気に似つかわしくない可愛らしい悲鳴を上げて、地面で打った腰を摩りながら少女は視線を上へとずらした。
「え……？」
さっきまで辺りには誰もいなかったはずなのに、目の前には大きな黒い人影。夏だというのに膝まであるロングコートを着ている。暗くて表情までは見えないが、背丈や体格からすると男性のようだ。
「コンバンハ……大丈夫カネ？」
頭上からしわがれた声が降ってくる。自分のことを心配してくれているようだが、男の口元は不気味に歪んでいた。その笑みを見た瞬間、少女の心の中に言葉では言い表せない不安感が広がっていく。
「あの、もう大丈夫ですから……」
スカートについた土を払いながら立ち上がり、急いで男との距離を取ろうとした。
「慌テナクテモ、イイジャナイカ」
走り出そうとした少女の白く細い腕に、蛇のように素早く男の手が伸びる。
「い、いやっ！」
振り払おうとしても男の握力は強力で、簡単には放してはくれない。それどころか嫌が

る少女の腕を強引に引っ張ってその細身を抱き寄せた。
「グフフ……若イ、牝ノ匂イダ……」
暗くて分からなかった表情が見えるほど至近距離まで男は顔を近づけ、下品な嗤(わら)いを浮かべクンクンと鼻を鳴らしながら肌や髪の匂いを嗅ぎ始めた。
「やめてっ……放してっ！」
少女は細い腕を振り回し身体をくねらせて抵抗するが、男はますます力強く抱きついてくる。鼻息を荒くしながら顔を近づけてきて、吐き出される生臭い息に嫌悪感と恐怖で少女の表情は強張ったままだ。
「味モ、申シ分ナイ……」
妖しく口元を歪めたまま少女の首筋に舌を這(は)わせる。男が口を開いた瞬間、その奥でキラリと光る二本の牙を見てしまった。
「ひぃっ……ま、まさか……本当に……」
最近町で流行っていた連続殺人の噂話が脳裏に浮かんだ。若い女性ばかりが狙われ、全身から血を抜かれて殺されているというものである。ある者達は吸血鬼の仕業だと騒ぎ立てているが、ほとんどの町の人々は信じてはいなかった。
少女も吸血鬼など架空の生き物だと噂話を本気になどしなかったが、今目の前にいる男はどう見ても人間ではない。八重歯とはいえ顎(あご)に届くほど長いわけがない。充血している

としてもここまで真っ赤な眼は見たことがない。
「きゃぁぁぁぁぁっ！　だ、誰か助けてっ、誰かッ!?」
本能的に身の危険を感じ、少女の抵抗はいっそう激しくなる。両手を力いっぱいバタつかせながらこれでもかと身体を捩り、男の足の甲を踵で踏みつけてやった。
元から夜ともなれば人通りの少ない路地である。それに加えて謎の猟奇殺人が続いているとあって助けを求める声に応える者などいなかった。
「大人シク、シロ……」
それでも男は顔色一つ変えずにイヤイヤと首を振る少女の頭を押さえつけ、その首筋に鋭利な口を近づけた。抵抗むなしく白く肌理の細かく瑞々しい少女の肌に、獣のような牙が突き立てられる。痛みに耐えようと顔を顰めたその時だった。
「ガハッ――――!?」
腕からきつく握り締められていた痛みが消える。目の前で髪を掴んでいた黒い男が地面へと沈んだ。
「え、何……？」
次の瞬間には、男の身体は数メートル先へと吹き飛ばされる。状況が飲み込めずに呆然とする少女と男の間にもう一人、新しい影が現れた。
「大丈夫だった？　夜中は出歩かないようにって、言われなかったのかしら？」

透き通るようなソプラノヴォイスだが、どこか高圧的な言葉が闇夜に響き渡る。スラリとしたシルエットは声色から、自分と同じくらいの少女のようだった。

「え、あの……」

よくは分からないが、目の前の少女は自分の敵ではないらしい。そう感じた途端に緊張の糸が解けて、全身から力が抜けてその場にへたり込んでしまった。

「悪いけど話は後にしてくれない？　まずはあの狂犬をぶちのめさないと」

くるりと少女がこちらに振り返った時、雲の隙間から月が顔を覗かせその姿がはっきりと見えてきた。

サッと片手でかきあげた紅髪は頭の高い位置で二つにまとめられ、その一本一本の先まで手入れの行き届いた髪質は月夜に照らされ高貴に輝く。

幼さの残るあどけない顔立ちながら、その本質的な美しさは他人にはないものだ。細く長い眉と長睫毛（まつげ）に二重まぶたと、少々ツリ目ながら大きな紅色の瞳。整った鼻筋にプリっとした唇と透き通るように透明感溢れる白い肌。

紅白の対比の美しさが目立つ顔と打って変わって、ドレスはこの闇夜に溶ける漆黒を身に纏（まと）っている。見た目の年齢の割りに長身で手足も長く、腰の位置も非常に高い。

そして同性すらも視線を奪われてしまうのは、その豊満なバストだった。露出度の高いドレスの中に押し込まれた巨乳は、大胆に開かれた胸元から今にも零れ落ちてきそうなほ

どのサイズを誇っている。上乳は露出し、あと少しで乳首が見えてしまいそうなほどだった。人形のような端正な顔立ちと、早熟した身体つきのギャップが少女の魅力をいっそう引き立てている。

「眼が赤く……完全に吸血発狂してるわね」

美少女に吹き飛ばされた男がユラリと立ち上がる。

「貴様……食事の邪魔ヲ、シオッテ……許サンゾ」

「お生憎様。誰もあんたなんかに許しを請うてなんかいないわよ！」

細かい刺繍の施された黒いタイツに包まれた両足が地面を蹴った。フリルのミニスカートが翻り、隠れていた白い太股がチラリと覗く。しかしそれも一瞬だけ。次に視界に謎の美少女を捕らえた時には、数メートル間合いがあったはずの男の鳩尾に蹴りを叩き込んでいた。不意を突かれた男の身体は再び地面へと転がる。

「ウガァァァッ!!」

腹を押さえながら立ち上がり、怒り狂ったように美少女に殴りかかる。

「そんな攻撃当たらないわよ」

真紅の髪を揺らしながら男の拳をヒラリヒラリとかわしては、カウンターで蹴りを打ち込む。

「最近、人間を襲っているヴァンプがいるって噂の犯人はあんたね？」

黒いタイツに覆われたしなやかな美脚で軽やかにステップを踏み、蹴りで確実に男へとダメージを与えながら少女は尋ねた。回避と攻撃の繰り返しはまるで舞を踊るような優雅さを窺わせるが、その表情は硬く燃えるような紅瞳を鋭く光らせ男を睨みつける。

「ソレガ、ドウシタァ〜？　血ヲ吸ッテ何ガ悪イィィィ!?」

狂ったように叫び、男はロングコートの裾を翻しながら美少女へと襲いかかる。

「人間を襲ってはいけないと、法で決められているはずよ？」

伸びてきた腕を蹴り落として、軸足を入れ替え反対の脚で男を蹴り飛ばす。

「ソンナ法律ナンザ、糞クラ……グエッ!?」

ヨロヨロと片膝をつき立ち上がろうとした男の脳天に、少女の容赦ない踵落しが決まった。ゴンッという鈍い音が響き、男の身体が地面へと沈んだ。

「今の言葉、リリーメイル王家への侮辱と見なし制裁を加える」

完全に白目を剥いて気を失っている男を見下ろし、少女は髪を払いながらツンと澄ました表情で言い放った。あれだけ派手に動いたというのに汗一つかかず、呼吸すら乱れていない。

「あ、あのっ……ありがとうございますっ！」

紅毛のツインテール少女は不意に背後から声をかけられ、驚いたように振り返った。

「へ……？」

男に襲われていた少女が駆け寄ってきて深々と頭を下げながら、何度もお礼の言葉を口にする。
「凄くお強いんですね。格闘技とかされてるんですか？」
「か、格闘技？　それに凄くなんて……」
目をキラキラと輝かせながら詰め寄ってくる少女の迫力に、先ほどまで顔色一つ変えずに男を蹴り倒していた美少女は急にオロオロとし始める。
「そんなことないです！　助けていただいて、本当にありがとうございます」
「べ、別にあんたを助けるためっていうか……」
自慢の紅い髪のように少女の頬は徐々に染まっていき、眉を吊り上げながらそっぽを向いてしまう。
「あの、よかったら家で……」
正義のヒロインに興奮していた少女の口が止まる。
「な、何……？」
照れくさそうに顔を顰めていた美少女が不思議そうに首を傾げる。
月を覆っていた雲が完全に流れてしまい、柔かな月光に照らされたツインテール娘の口元がキラリと光る。
「きゃあぁぁぁぁぁ――――ッ!!」

それを見た少女は耳を劈くような叫び声を上げながら一目散に走り出していた。
「あ、ちょっと待ってっ……」
誰もいない路地裏にポツンと一人取り残された美少女は、怒りに頬を膨らませる。
「ふん、何よ失礼しちゃうっ。私だって吸血鬼だけど人間を襲うような野蛮な真似はしないわよっ！」
正義のヒロインから一瞬で悪役扱いされた少女は紅い二本の髪尾を揺らしながら、不満げに夜の闇へと消えていった。

「どういうことか説明してもらおうかしら？」
不機嫌そうな足音を鳴らしながら、真っ赤な絨毯の敷かれた廊下を一人の少女が歩いていた。立ち止まった先の扉を勢いよく開け放ち、部屋へと入るなり第一声を発する。
「これはこれは……アリス姫君、ご機嫌麗しく……」
突然の訪問者にやや驚きつつも、部屋の主は恭しく頭を垂れた。
「今の私が機嫌よさそうに見えるなんて、あんたも痴呆が始まったのかしら？」
アリスと呼ばれた少女は紅い髪を二つにまとめ、紅色のツリ目で目の前の男を睨みつけた。幼さの残る顔立ちのわりに、黒のドレスに包まれた肢体はメリハリがしっかりとしていて大人の色香を感じさせる。

何を隠そう彼女ことがヴァンパイア界の王ヴォルガンク＝リリーメイルの一人娘で、王女のアリス＝リリーメイルである。

「またご戯れを……」

豪華な衣装を身に纏い立派な顎鬚を蓄えた男は、何のことか分からないと大げさに肩をすくめて見せた。その惚けたような態度がプリンセスの感情を逆なでする。

「とぼけんじゃないわよ！　発狂したあんたの部下が人間を襲ってたわよっ!!」

アリスがここまで怒るのにはわけがあった。

ヴァンパイアの歴代の王達は温厚派と過激派に分けられる。現王のヴォルガンクは温厚派の王で、人間を襲いその血を吸うことを全面的に禁止していた。

アリス自身も人間とは仲良くして行きたいと思っているが、自分が吸血鬼であるために恐れられることに心を痛めていた。そのため吸血鬼が人間を襲い、自分達が怪物などと同じように思われるのが許せないのだ。

「はて、私の部下？　発狂していたというのなら、もはやその者に理性はなく、私共でも手のつけようがございません」

しかし吸血鬼にとって人間の血は何よりの馳走で、最高の美味であった。それを食することが禁止されているのだから、当然不満に感じる者達も出てくる。現王のやり方に異議を唱え、積極的に人間を襲って血を吸いたがる過激派のリーダー格が、今アリスの目の前

にいるルーマイユ侯爵だった。
「手のつけようがないですって？　なら、人間を襲っている吸血鬼を徹底的に私が捕まえていっても文句はないわね？」
本来なら王律に背くような行為を取れば、即罰せられる。人間を襲っている吸血鬼達を裏で指示しているのは、明らかにルーマイユ侯爵なのだが物的証拠を残さないのだ。それにルーマイユ侯爵といえば、リリーメイル王家の筆頭貴族である。いくら王女のアリスといえども簡単に、尋問したり直接処罰を下すことはできない。
「姫様の意のままに」
最後まで自分は関係ないという態度を崩さない侯爵に、アリスはこれ以上何を言っても無駄だと感じクルリと背を向ける。
「姫様、吸血鬼が人間の血を吸うのは食物連鎖という自然の摂理に基づいた行為だと、私は感じますがね」
顎髭を撫でながらニヤリと不敵な笑みを浮かべる貴族。
「食物連鎖？　そんなことより、あんたは忠誠心ってもんを勉強した方がいいわね」
余裕たっぷりのルーマイユを一瞥（いちべつ）し、王女はまた不機嫌そうに足音を立て鳴らしながら部屋を後にする。
「生意気な小娘め……」

「ウソよっ、こんなの認めない……けど、くはぁンっ！」

言葉では必死に否定しようとしているが小刻みに身体は震え、屈辱の触手責めを肉体は求め悦んでいるのだ。全身を弄られることを屈辱と感じる暇もないほど激しい愛撫にプリンセスは翻弄されっぱなしだった。

「も、もうっ……はぁはぁ、ダメぇ……んぐっ、んンン――――ッ!?」

突然宙を彷徨っていた一本の触手が口内へとねじ込まれた。あまりの衝撃に顎が外れるのではないかと思うくらい、口腔が粘液で濡れた軟体物でいっぱいに満たされる。先端の亀頭部が舌を巻き込みながら喉の奥へと進んでいく。粘液の異臭と苦味が舌の上に広がり、激しい嘔吐感に襲われる。

胸を揉まれたり乳首を弄られたりすることは、不本意ながらも気持ちよかったが今は違う。ただ苦しいだけなうえに、無理やり口に触手を咥えさせられているのだ。プライドの高いアリスの理性が朦朧とし始めていた思考の中に戻ってくる。しかし全身はいまだに高い興奮状態のままで、痙攣を起こしたかのように手足が痺れていた。

口の内に侵入してきた異物を押し出そうと舌や唇をモゴつかせるが、触手の力には敵わなかった。蠢く触手からはどんどんと生臭い粘液が分泌され、唇の端から涎のように零れ落ちて口元を汚していく。

「んぐっ！　んむ……んごぐ、んむぅ……んーっ！」

試読ページ
えっちなスターター

口の奥へとねじ込まれる触手のせいで、気管が圧迫されて息苦しい。その上、粘液が喉に絡みついて呼吸困難になってしまうのだ。酸素を求め仕方なしに、口の中に溜まった触手獣の体液を飲み込む。苦味の強い透明液を飲み、わずかにできた隙間から少し空気を吸うと、また粘液を飲まなくてはならなかった。脳内に酸素が行き渡らず、視界が霞んで頭がクラクラとし始める。

（苦しいっ……苦しいのにぃ……）

次から次に流し込まれる粘液を飲み干していくうちに、愛撫と同じようにだんだんと感覚が麻痺してきて苦しさが薄れてくる。気持ち悪さと不快感のかわりに、火照った触手に擦られた喉の粘膜は火傷（やけど）しそうなほど熱くなっていた。

「ゲホ――――ッ！　あひぃぃンっ！　そ、そんな、今はダメぇえぇぇン――――っ!!」

胸や口にばかり意識が集中していたせいで、急に下半身の責めを再開された瞬間にアリスは触手を吐き出し、あられもない嬌声（きょうせい）を上げてしまった。乳辱の興奮で女陰は蜜が溢れ、その分泌液を絡め取るように肉弁を触手で擦られる。ショーツの中で蠢く触手は尻房をなぞり、溝に沿うように愛撫を繰り返してその先端でヒクつく窄まりを探り当てた。

「きゃひぃンっ！　ど、どこを触って……ひゃぁ、ングぅぅ……」

抵抗する声を遮るように再び口に太い触手がねじ込まれ、口の奥を出たり入ったりしてピストンを始めた。じゅぷじゅぷと淫猥な水音を立てて唾液と粘液が泡立ち、その混合液

を飲み込んでいるうちに、もう触手液の匂いも味も分からなくなっていた。
（ど、どうして抵抗できないのっ……何も考えられないっ！）
激しく責められる口内とは対照的に、全身を弄っている触手の動きは優しくて焦らすような愛撫を続けている。じわじわとぬめる太股や腕、背中や首筋に擦りつけるように這いずり回る。特に乳房や女陰には大小様々な触手が無数に群がり、揉んだり撫でたりと好き放題に責めまくっていた。
早熟した乳房は艶かしく揺れ躍り、汗や粘液で濡れ光っている。プルンプルンと刺激に合わせて弾み、ブラからはみ出したピンク色の乳輪は興奮のあまりにぷっくりと膨れ上がっていた。その中心でジンジンと痺れて痛いくらい敏感になっている乳頭も、硬くシコって尖っている。そこを何本もの触手で一気に責め立てられては、性的快感に疎いアリスは堪ったものではなかった。
（うぅ……き、気持ち、いいっ……なんで、こんな……）
性感帯とはほど遠いはずの背中をなぞられただけで背筋は震え、粘液まみれになった前身を触手が這いずり回る。頬や汗の滲むうなじにまで触手が押しつけられ、トレードマークである紅色の髪まで体液で汚されていた。触手はプリンセスの愛液で濡れた内股を擦り、淫唇だけでなく股間全体を愛撫する。火照った肌を愛撫される心地良さに、ぬるぬるとした感触が下半身の疼きを激しくした。

触手は焦らすように女陰の入り口をなぞるばかりで、それより奥には一切触れようとしないため膣肉には愛撫をされていない。それでも内股や淫唇ばかりを執拗に責められて、切なくて堪らなかった。

（もっとっ……うぅ、違うっ、ダメぇ……）

触手がビクビクと脈打ちながら瑞々しい巨乳を揉み潰し、乳首を擦り突っついた。口内いっぱいに頬張った触手は喉奥の粘膜を扱き上げる。喉を犯す触手はさらにその動きを速めて、荒々しくなっていった。プリンセスは二本の髪尾を振り乱しながら必死に侵入してくる異物の苦しさに耐えている。

興奮で火照る全身は淫らな触手に責められ続け、理性など吹き飛ばすほどの肉悦に満たされていた。思考も完全にショートしてしまうほどに強烈である。

口内を出入りする触手のスピードはさらに加速し、全身の愛撫も激しくなっていく。暴走寸前の性欲を前に、無意識のうちに喉を犯される悦びに浸っていた。このまま快楽に身を任せてもいいと思い始めた瞬間。

口の奥まで突き込まれた触手も、全身にまとわりついている触手もさらに熱を帯びてビクビクと小刻みに震え始めたのだ。それが何を意味するかは処女のアリスにも、本能的に理解できる。慌てて触手を吐き出そうとするが、もう間に合わなかった。

ビュルッ！　ビュブッ！　ブビュルビュビュ――――ッ！

口内を肉棒でいっぱいになりながら、モゴモゴと抵抗の声を上げる。しかし声すら生温かい吐息となって男根を愛撫し、湧き上がる唾液が唇の端から零れてピストンの潤滑をよくする。

太く逞しい肉棒を深々と突き込まれる度に、肉悦でヒクつく大陰唇の間からは透明な愛液が溢れて胸の昂りが激しくなったいく。まるで小水を漏らしたかのように蜜は、震える内股を伝い膝先にまで流れ落ちていった。

「ぬっ、いかんっ！」

苦味の増した先汁を滴らせていた肉棒が慌てて口内から引き抜かれる。激しいイラマチオから解放されたアリスは床に倒れ込み、乱れた呼吸を整えようとゼエゼエと肩を上下に揺らしていた。

「私としたことが思わず、射精しそうになるとはな。やはり濃い一発目はお姫様の子宮にたっぷりと注いでやらんと」

顎鬚を撫でながら侯爵は四つん這いの状態のプリンセスの背後に回る。

「な、何を……？」

高くお尻を突き出すような格好になり、スカートは捲れ上がって白い尻肉どころか女陰や不浄の穴まで丸見えになっていた。全身は汗まみれで黒のドレスが肌に張りつき、触手の魔液で汚れた姿は酷く扇情的で男の欲情を誘う。

つちのこ読み放題！

「ほ～ら、今すぐに挿入れてやるぞ……」
逃げられないように王女の腰をガッチリと掴んで固定し、我慢汁を滴らせている亀頭を淫裂に押し当てた。
「ちょ、ちょっとまさかっ⁉　やめてっ、やめなさいってばッ‼」
侯爵が何をしようとしているのかを悟り、プリンセスは慌てて身体を捩り抵抗しようとするが疲労感のあまりに手足が言うことをきかない。ドス黒い亀頭と淫唇が絡みあってくちゅりと湿った淫質な音が鳴って、秘肉にじわじわと肉棒が食い込んでくる。
「い、いやぁぁぁッ！　ダメっ、ダメぇぇぇぇぇ――――ッ‼」
必死に叫ぶ王女を押さえつけ、貴族は腰を前へと突き出していく。亀頭の一番太いカリの部分が大陰唇にひっかかり、膣内の圧迫感が強くなる。
「すぐに気持ちよくしてやるから、じっとしてろっ」
「き、気持ちよくなんかないっ！　さっさと抜きなさいよッ‼」
愛液でぬめる肉壁を押し分け進んでいく男根の先が、処女膜に突き当たった。ルーマイユは暴れる王女の細腰を抱き寄せ、力いっぱい腰を突き立てて淫裂へとねじ込んだ。
「きゃひいいいいいいいいいン――――ッ⁉」
ブチッという生々しい音が聞こえ、膜が破ける感覚と激しい痛みが股間を襲った。構うことなく男根は最奥まで突き入れられ、今度はカリで肉壁をこそぎながらズルズルと引き

抜かれる。二度三度と軽い出し入れが続いた後、本格的にピストンが始まって牡棒の先端が子宮口を突き上げる。

「う、ウソでしょ……あっ、あはぁん……は、挿入(はい)ってるぅ！」

膣壁を擦り上げられるという生まれて初めて味わう感触。今まで誰にも触れることすら許さなかった秘肉が、大嫌いな男の熱い男根で広げられ満たされている。それなのに乱暴に何度も突き上げられているうちに、破瓜の痛みはだんだんと薄れ弱まっていた。

「これは予想以上に上玉だな……キツくていやらしく絡みついてきおる」

ルーマイユは唸りながら王女の処女肉の感触を堪能しているが、当のアリスはそれどころではなかった。ビクビクと脈動する肉棒で愛液の溢れる膣壁を擦られて、痛感すらも心地良い痺れに変換される。激しい刺激が一気に押し寄せ、意識が飛びそうになった。

「くうっ、うっ……はぁ、ンんぅ――――ッ！」

痛みなのか気持ちいいのか分からない曖昧な刺激に思考は翻弄され、必死に喘ぎ声を我慢し抑えようと床の上で腕を組み顔を埋める。しかし頭を下げるとますます下半身を突き出す結果になり、男根に自ら尻を押しつけてしまう。

「大切な処女を奪われた気分はどうなんだ？」

普段は生意気で高飛車な王女を無理やり犯し、優越感で息を荒くした侯爵は容赦なく腰を打ちつけてくる。太い剛直を咥え込まされた淫唇は痛々しく広げられ、秘裂の間からは

赤い処女の証が太股へと伝っていった。
「うぅ……くっ、最低っ……」
犬のような格好で無抵抗のまま犯され、何もできない悔しさで王女の瞳には涙の粒が溢れてくる。唇をキュッと噛みしめながらこの屈辱に耐えていた。
「ほら、オマ〇コをえぐられてどうなんだ？」
ルーマイユは尻肉から手を離し、腰の動きに合わせて揺れていたツインテールを掴んで手繰り寄せた。ガクンと頭が後ろに引っ張られ、アリスは強制的に上を向かされる。
「い、痛いっ、引っ張らないでっ！」
まるで馬の手綱を引くかのように王女の髪を掴み、侯爵は激しく腰を振り強引に男根を淫裂に突き立てた。肉棒が最奥まで到達すると今度は勢いよく引きずり出され、エラが処女の証と白く泡立った愛液を掻き出していく。膣内をいっぱいに満たしている男根が、中で動いている感覚に子宮が反応し牝の悦びが湧き上がってくる。
（こ、こんな奴に犯されてるのに……声が漏れちゃうっ……）
秘裂を憎き男の男根に貫かれて処女を奪われたというのに、身体は初めての性交の味に浸り始めていた。あまりの肉悦に喘ぐ戦女神の悩ましい唇からは、熱っぽい吐息が次々に漏れる。
「あふぅ……ダ、ダメぇ……そんなに激しく突かないでぇっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/